

## 幼児のボール遊びに関する研究⑥

——投捕を基礎としたボール遊び——

徳島大学学芸部体育研究室 岡本卓夫

前回にはホルディング(持つこと)を基礎としたものについて報告しましたが、今回は投捕を基礎とした遊びについて報告します。

この遊びは主として男子に好まれるものが多いが、女子の場合でも殆んどよろこんでします。幼児たちはボールを持つと大体一度は投げてみます。と同時に捕えようとします。とくに二人以上になるとその傾向が強いものです。それが上手にできないとしても、いっしょに遊ぶために相手に投げ、また投げ返すというプロセスをたどり、ります。そのプロセスにおいて彼らは身体支配とか、インサイド(洞察力)を自然に獲得していきます。それでは、このボール遊びから獲得する彼らの経験内容にはどんなものがあるのでしょうか。

- (一) ボールが手からはなれるときの感覚を知ることが出来るようになる。
- (二) 投げるとききの脚と手のバランスを知ることが出来るようになる。
- (三) 遠近の目標に向っての正確な投げ方を知ることが出来るようになる。
- (四) 直線投げ、フライ投げの投げ方を知ることが出来るようになる。

(五) 捕球におけるタイミングと方法を知ることが出来るようになる。

(六) ボールの硬軟、大小、質などによって、いろいろ投捕球の仕方が異なることを知ることが出来るようになる。

以上がこの遊びにおける主なる経験内容になります。つきにその遊びの代表的なものについて数種紹介することにします。

### (一) 的あて遊び

○人数 一人〜六人(グループの時は五〜六人とする)

○準備 幼児ボール(大)一、直径五〇㎝のサークル一、紅白球一人に一個宛

### ○遊びの目標

各プレイヤーは二〜二・五米の距離から、サークル内に置かれたボールに、紅白球を投げ当てて遊ぶ。

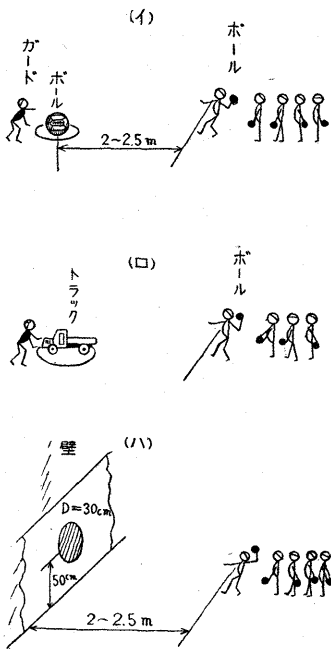
○ルール

1. 一人の時は自由に投げてよい。
  2. グループでするときには、一グループから一人のガード(ボール置き)が出ることに。
  3. ガードになったプレイヤーは、サークルの近くに位置し、ボールが円外へ出たら入れることをする。
  4. 各プレイヤーは二個以上投げてはいけない。
  5. 線の内側から上手投げで投げることに。
  6. ボールに当たった人(いかに当たっても良い)は、その球を再び拾って、列外に位置する。
  7. あたらなかったプレイヤーは、そのまま列外にいつしよに並ぶ。
  8. 全員が終り、多く当たった組が勝ちとなる。
- 留意点
1. 全員が終わったらみんなまで、あてた人の数を読ませる(このとき球を高くあげさせていくこと)
  2. グループ編成は三組くらいまでとし、人数の多いときは二回に分けてするのが良い。
  3. 小さなゴムボールを使用しても良い。
  4. 遊びを始める前に各プレイヤーに、一個宛ボールを持たせて置くこと。
  5. ボールの数が少いときは、先頭のものだけに先に渡して置き、

つきつきとリレーさせる。ただしこのとき、的にあてた人とあてなかった人の区別をはっきりすること。

6. この遊びでは投げるものが球製なら、的は玩具でもまた壁に円を書いて、どんな的でも良い。台をつくるのもおもしろい。

7. 投げる球は片手で握れるものを使用すること。



(二) 輪ぬき遊び

○人数 一人〜六人(グループのときは五〜六人とする)

○準備 直径五〇㎝の輪一。各プレイヤーに紅白球(小さなゴムボ

ール)一個宛

○遊びの目標

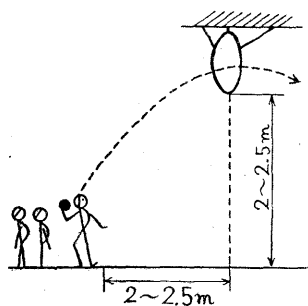
床、あるいは地上二〜二・五米の高さに吊られた輪の中を、規定の距離からボールを投げて、くぐらす遊び。

### ○ルール

1. 一人のときは自由に投げてよい。
2. グループで遊ぶときは、輪の真下より、二〜二・五米の距離から投げる。
3. 各プレイヤーは二個以上投げてはいけない。
4. 線の内側から上手投<sup>うまて</sup>げで投げること。
5. 輪の中をくぐらすことができたプレイヤーは、そのボールを持って、列外に位置する。
6. くぐらすことができなかったプレイヤーは、そのままで列外にいっしょに並ぶ。
7. 多くくぐらせた組が勝とする。

### ○留意点

1. 遊びが終わったら、くぐらせた人数をみんなで数えさせる。
2. グループは三組以内がよい。
3. ボールの数が少ないときは、交代でさせる。ただし、くぐらせた人と、くぐらせなかった人の区別をはっきりすること。
4. 輪はどんなものを利用してよい。ただし揺れないように固定して置くこと。
5. 輪の両側にグループを置いて遊ぶのも良い方法である。



### (三) 投げ込み遊び

○人数 一グループに八〜一〇人。

○準備 ネット一、紅白球二〇(紅一〇、白一〇)

### ○遊びの目標

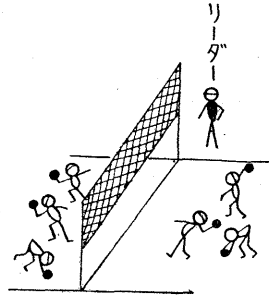
二つのグループは、ネットをはさみ紅、白、に分れ、球を持って場内に立つ。リーダーの合図で、互いに相手の球を投げかえしながら、味方の球を多く相手側に投げ込む遊び。

### ○ルール

1. 一度に二個以上投げることはできない。
2. 止めの合図があったら、ただちに止めねばならない。

### ○留意点

1. 時間は一分く二分とし、何回にも分けてするのがよい。
2. ネットの高さは二米までとし、もしネットがなければ、低鉄棒を利用したり、繩を張ったり、何を利用してても良い。ただしこのとき、その真下に、線をはっきり引いて置くこと。
3. ボールのないときは、紙を丸めてやってもよい。
4. 「止め」の後で、各グループに数を数えさせること。
5. 色分けして数えなくても、全体の数でもよい。
6. 両グループ陣の広さの条件を考慮すること。



(四) 紅白球入れ

○人数 一グループ一〇名

○準備 一グループに紅白球三〇個。籠および棒一組

○遊びの目標

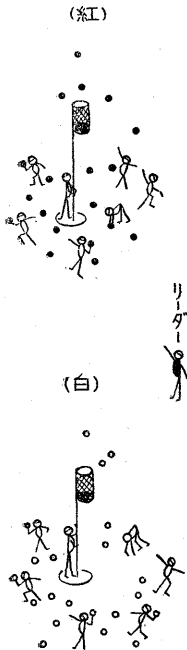
約十米はなれて、紅、白両グループは、籠を中心にしてボールを持って立つ。リーダーの合図により、互いに味方の籠の中へ多くの球を投げ入れっこする遊び。

○ルール

1. 相手のボールがはいっていても得点数にはならない。
2. 一度に何回でも投げ入れることができる。
3. 投げる方は自由である。
4. 一定時間で多く入れた組が勝ちとなる。

○留意点

1. 時間は一分く二分くらいで何回にもするとよい。ただしリーダーはボールの入り具合をよく観察して少しくらいの時間のずれはよい。
2. 籠の高さは二米とする。
3. 終るたびに、みんなで数を数えさせる。
4. プレイヤーの中から籠持ちを交代に出させること。



(五) リング・トス

○人数 一グループに五人、六人

○準備 一グループに直径五〇釐のサークル一つ、各人に紅白球あるいはビーンバグ(豆袋)二個宛。および籠一つ。

○遊びの目標

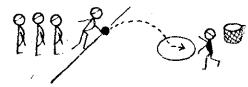
グループはサークルより二、三・五米の位置に各人球を二個宛持つて縦に一列に並び、サークルの中に順次球を投げ入れる遊び。

○ルール

1. プレイヤーは線の内側より下手<sup>しよて</sup>投げで投げ入れること。
2. サークルに少しでもかかっていたら、成功とみなす。
3. ガードになつたものは、成功した球だけを、横にある籠の中に入れる。
4. 二個投げ終つたプレイヤーは、列外に位置する。
5. 多く得点した組を勝ちとする。

○留意点

1. 紅白球を使用するときは、サークルを直径一米くらいとし、ビーンバグのときは、五〇釐くらいでよい。
2. 必ずしも籠に入れさせなくても、成功した球をそのプレイヤーに持たせて置くのも良い。ただしこのときはガード不要。
3. 終つたら、みんなで数を数えさせること。



(六) ティーチャーボール

○人数 六人、八人を一グループ

○準備 一グループに幼児用ボール(大)一つ。

○遊びの目標

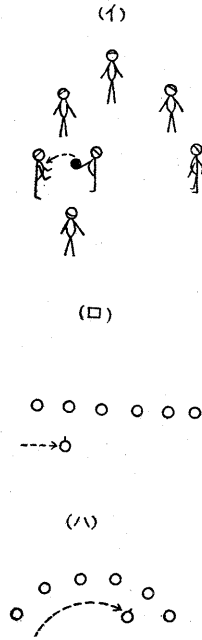
グループは手をつないで大きな円をつくり、その中の一人が出てボールを持ち、各プレイヤーの前を通過しつつ、ボールを投擧して行く遊び。

○ルール

1. 下手<sup>しよて</sup>投げで投げ、落さないように捕えること。
2. 一回通り終つたら、左(右)のプレイヤーにボールを渡し、自分の位置にかえる。
3. 次のプレイヤーも同様式で投擧していく。
4. 競走のときは、一回通り早く終つた組が勝ちとする。

○留意点

1. 最初は手渡しから初め、次第に間隔をとるようにする。
2. サークル中にはいってやらなくても、そのままの形で遊べる。
3. いろいろのボールを使用してみる。
4. 横隊とか、扇形などいろいろの隊形ができる。



(七) 名指しボール

- 人数 五人〜六人を一グループ。
- 準備 一グループにボール一個。
- 遊びの目標

プレイヤーは、手をつないで大きな円をつくり、その真中にリーダーによって選ばれた一人のプレイヤーが、ボールを持って立つ。「始メ」の合図で、ボールを上には投げ上げると同時に円周上の誰かの名を呼び自分の位置にかえる。そのとき名指しされたプレイヤーは走り出て、そのボールを捕えるという遊び。

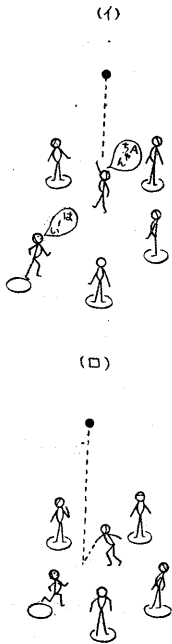
○ルール

1. 捕球のときは何回はずませて捕えてもよい。

2. 名指しされたプレイヤーが、つぎのセンタープレイヤーになる。
3. センタープレイヤーは、下手投げしたてでできるだけ高く真上に投げること。

○留意点

1. 同一人ばかり呼ばせないようにする。
2. 真上に投げることは、むつかしいので、サークルは十分大きくとらせて置く。
3. 位置が定ったら小円をかかせるのがよい。
4. 投げ上げる代りに、床、あるいは地面に一度ぶっつけさせてもよい。
5. いろいろのボールを使用してみるとよい。



以上で投捕球を基礎とした遊びの主なるものを報告したが、次の回には、バッティング(打つこと)と、キッキング(蹴ること)を基礎とした遊びについて報告する。